

No. 371【2018年8月30日配信】

「あおり土偶展」を見学して(担当:児玉)

こんにちは。文化財課の児玉です。

先日、縄文時遊館で9月1日まで開催中の特別展「あおり土偶展」に行ってきました。この土偶展では、15年ぶりに里帰りする亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶、期間限定の展示ですが「縄文の女神」と呼ばれる山形県西ノ前遺跡の日本最大の土偶(国宝)、北日本最古(約9千年前)の土偶など数多くの土偶が展示されています。

土偶は、主に縄文時代に作られた素焼きの人形のことで、縄文人の精神性を伝えるものです。胸の膨らみや妊娠している時のようにお腹が大きい土偶があることから、女性像として理解される場合が多いのですが、性を超越したものとの説や、精霊を表現したものとの説もあります。

土偶の特徴は時代によって変化します。縄文時代早期や前期の土偶は、小型で扁平な逆三角形のものが多く、中期になると逆三角形から徐々に十字型に変化し、目・鼻・口がはっきりと表現されるようになります。

さらに中期の終わり頃から後期にかけては、逆三角形の体になり、顔が突き出すとともに、2本足の土偶も作られるようになります。

後期後半になると、合掌土偶などのように人の形をよりくわしく表現したものや、土偶の中身が空洞になっている中^{ちゅうくう}空土偶が現れます。

晩期になると、大きな目が特徴の遮光器土偶が数多く出土します。遮光器土偶の「遮光器」とは、イヌイトやエスキモーが雪中行動する際に着用する眼鏡(スノーゴーグル)のことです。今回の土偶展で展示されている亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶は、「しゃこちゃん」として親しまれるとともに、教科書や漫画などに数多く登場していることから、日本で最も有名な土偶といってもよいでしょう。